

を語られ、子どもが読書することについて、しつかりとした根、喜びと想像の強い翼、そして、痛みを伴う愛、という言葉によつて、その意義を示されたことは、われわれ児童文学を愛好する者にとつて、かけがえのない示唆を与えられたと感じている。」

美智子様様の基調講演は、本と共に生きることの本源的な喜びと、その喜びを子どもたちも体験してほしいというひたむきな思いにあふれており、老生にとつても、今までに接した読書論の中で最も感銘深い読書の薦めです。美智子様は、ご公務面をはじめ、音楽やスポーツなどあらゆる領域で卓越したお力を発揮されていますが、殊に美智子様のお言葉は、まさに「魂に至る言葉」であり、常に清新の気を与えてくださるのです。

美智子様が詠まれた御歌を拝読致しますと、その思いがいっそう深まり、お立場の重みは全く異なつても、自分も、自分なりに頑張ろうという元氣や励みを分け与えてくださいます。

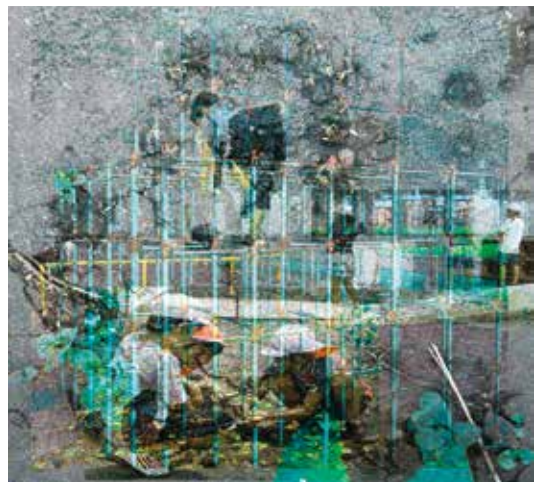
その中で、特に心に残る三首を掲載させていただきます。

かの時に我がとらざりし分去れの

片への道はいづこ行きけむ

《「あの時に私が選択しなかつた別れ道

のもう一方の道は、どこへつながつて行ったのだろうか。」という歌意かと存じます。「かの時」とは、美智子様が民間から初の皇太子妃になられる決心をされた時とのことです。ご自身の使命と責任を真摯に受け止められ、皇室の伝統を守りながら、従来の発想にとられない瑞々しい感覚で活動され、皇室と国民の架け橋になられた美智子様、余人には計り知ることのできないご心労と同時に、信頼される天皇陛下とご一緒に今在ることのお慶びがうかがえます。平成6年、還暦を迎えられた美智子様は、「結婚は私の生活を大きく変えましたが、陛下は寛いお心で、ありのままの私を受け入れ、今日に至るまでゆつくりと導き続けてくれました。〈中略〉この日に至れたことを感謝し、陛下のお側で、また明日からの務めを果たしていきたいと思えます。」というお言葉を残されたからです。美智子様はまた、昭和31年に発売された「ここに幸あり」という歌をよく口ずさまれ、ピアノの弾き語り披露されたこともあるそうです。「嵐も吹けば雨も降る女の道よなぜ険し君を頼りに私は生きるここに幸あり青い空」という歌詞とメロディーに、ご自身のお心の歩みが重なり、深い共感を覚えられたのでしょうか。》



初夏の光の中に苗木植うる

この子供らに戦あらずな

《「初夏の光を浴びながら、苗木を植えているこの子供たちに、決して戦争があつてはならない。」という御歌で、苗木の生長とともに成長し、成人となる子供たちに、「将来、絶対に戦争をさせてはいけません。」という美智子様様の強い反戦の願いが、「あらずな」という禁止の表現に込められています。——戦あらずな、心に凜と響くお言葉です。》

今しばし生きなむと思ふ寂光に

園の薔薇のみな美しく

《平成最後となる今年一月の「歌会始の儀」に寄せられた御歌です。「なむ」

は強い希望や意志を表す言葉ですので、「年齢を重ね、老いの不安を感じながらも、もう少し生きようと思う。見守りたいこと、見届けたいことがあるから……。〈そう念じつつ〉御所の庭を散策していると、バラの花が淡い光に照らされて美しく咲き誇っており、今しばし生きよう、生きたいと切に思う。」という歌意かと存じます。今しばし生きなむ、というご決意には、国民の平和と安寧、そして、上皇陛下のご健康とご長寿を祈念されるお心とともに、平成29年9月3日、宮内庁がご婚約の内定を発表し、赤坂東邸で婚約者のご婚約内定記者会見を行った皇孫、眞子様のご結婚の問題があるのではないかと案じております。》

美智子上皇后陛下におかれましては、上皇陛下とご一緒に仲睦まじく、いついづまでもお健やかに……。と心よりご祈念申し上げます。

《参考・引用図書》

- 「皇后陛下お言葉集あゆみ」海竜社発行
- 「美智子さま御歌」秦澄美枝著 PHP発行
- 「皇室」扶桑社発行
- 「信濃毎日新聞」
- 「美智子皇后の70年 女人抄」藤原佑好著
- イースト・プレス発行